
不幸のハロウィン

桐生結奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不幸のハロウイン

【Zコード】

Z52160

【作者名】

桐生結奈

【あらすじ】

上条当麻は夕食の買出しに街へと出かけた。その町並みがハロウイン一色になつていて、ことに感慨にふけ、空を見上げた。そのまま歩いていると、前を歩いていた女の子にぶつかってしまった。その女の子とは

魔術と科学が交差する時、物語は始まる

。

(前書き)

禁書の小説はこれが初めてです。世界観など全く分からないど素人ですが大目に見てあげて貰えたら嬉しいです！

わたくし、上条当麻は『学園都市』の高校生にしてレベル〇のワニクを持つ人間である…。つて虚しいじゃんかよ！夏休みから始まつたおかしすぎる現象は未だに続いており、秋も深まる今日この頃、ハロウインが近づいていたりするのだが、もちろん何があるわけでもなく、ぼつと歩いていたりするのであった。本当は夕食の買出しなんだが。

「すっかり、街はハロウイン一色だな…」

ジャック・ランタンのカボチャの飾りを見ながら溜息をつく当麻。学園都市はイベント好きの都市らしい。らしいというのは、とある事件により当麻の7月30日以前の記憶が抜け落ちているためである。

そう、彼は記憶喪失なのだ。それでもある少女を哀しませたくない思いから記憶が無い事実を隠し、今日まで生きているのである。それはとてもない辛さがあった。記憶があればハロウインの楽しい出来事も思い出せただろうに、今は何一つ覚えていない。

「ハロウインにちなんで、カボチャ料理でも作るか？。インデックスも喜ぶだろ」

ぽけっと歩きながら呟く当麻。インデックスとはイギリス清教のシスターで当麻の部屋のブランドで出会った少女にして哀しませたくないために事実を隠している当人でもあった。

空を見上げればゆるゆると雲が浮かんで動いていく。見上げたままぼへつと歩いていた当麻は前を歩いていた女の子にぶつかってしまった。

「さやあつー？」

「おわつー？あ、すみませんっ！！余所見していまして…」
当麻はすぐさま謝った。いたたつとお尻を撫でながら「なんのよ…」とグチりながら立つ女の子。そして女の子が当麻を見た瞬間、

「なんで…アンタがここにいんのよつー？」

と叫んだのは、学園都市第3位にして超電磁砲×レールガン×の異名を持つ 御坂 美琴 であった。

「…なんだ…、ビリビリかよ…。かしこまつて損したじやねえか」
相手を見た瞬間、当麻は溜息をして呟いた。

「な、なんですかっ！？」人にぶつかって置いて、出る言葉はそれなわけ？」

バチイツと美琴は放電する。その電撃は道のタイルを碎いた。

「おいおい、公共物を壊すなよ…。それにここで電撃を出すなって。歩行者の皆さんのが妨げになっちゃつだらうが」
呆れ顔で注意をする当麻。無論美琴にはその言葉が無性に腹立つもので今にも全力で放電したい気分だった。

「うつさいわよ！ アンタが女の子に対するマナーがなつてないのが悪いんだからねー！」

「はいはい、すみませんね。よそ見てたわたくしがわるう御座いました。これでいいか？」

「……アンタって、人を怒らせるのが得意みたいね…。受けてた

とつじやないの……」

そう言つと美琴はバチイチと当麻に向かつて放電した。電撃はまつすぐ当麻に向けて放たれた。がしかし、当麻は右手でそれを打ち消した。

「あ、あぶねーじゃねえか!? サすがの上条さんも不意打ちにはびっくりして当たるかもしれないだろ!?」

「しつかり防いだくせに! つけあがつてんじやないわよ!」
更に威力をあげて電撃を放つ美琴。放つと同時に辺りは停電してしまつた。夕方なのでまだそれほど影響は出ていなかつたが状況はかなりヤバかつた。電気に関わるものは全て使えなくなつてしまつているので電気が点かないなどの影響はこれから出てくるだろ?。当麻は美琴に怒らせないよう優しい口調で言つた。

「おーい御坂さん! これくらいにしどかないか? そろそろ風紀委員>ジャッジメント^くや警備員^くアンチスキル^くが来ちゃうぞ? だから……」

当麻が言い終わらない内に遠くからサイレンが聞こえた。その音に美琴も賛同する他なかつたらしく、2人はその場から立ち去つた。

「はあはあ! 何とか間に合つたな! 全く、お前に会つところくなことねえよ! 何で全力で逃げなきゃなんないんだよ! 不幸だ!」

「そ、それはこっちのセリフなんだつから……ね。はあはあ! なんで私の電撃が効かないのよ……」

「だから、この右手にはだなあ……」

「あつ……もつこんな時間! ? 急いで帰らなくひや……」

当麻の言葉を遮り美琴は時間を見て帰路へと急ぐ。振り返って、

「次は絶対勝つてみせるからね！……覚悟しなさいよ！……」
びしつと当麻に指差し、帰つて行つた。その態度に当麻は溜息をつきながら、「はいはい」と気の抜けた返事を返したのだった。

♪113229-1695♪

そして部屋に戻ると、玄関先にインテックスが二コ二コと満面の笑みで待つていた。当麻は凄く嫌な予感を察した。そして顔から冷や汗が噴きだしていた。やるべきことを今思い出していたのである。

「た、ただいま戻りました…。インテックスさん…？　あの…　こんな学生風情にお出迎え、痛み入ります…」

笑顔を引きつりながら言つ当麻。次に起こる出来事を予測しているようだ。

「どうま…、今何時かな？　私物凄くお腹減つたんだけど…？　美味しいご飯が食べたいかも」

一コオツと笑顔で話すインテックスの顔が次第に強張つた笑顔になつていた。

「そ、そーで、買つますよね！　あははっ…。えーっと…買つてきます…」

「とつま、何しに行つたんだつたかな？　ねえ？　ねえ？教えてほしいかも～」

「夕食の材料を買いに行かせて貰いました…がいろいろありますて買ひ損ねました…とか言つたらやつぱり怒りますよね？」

恐る恐る答える当麻。答えながら聞き返す。その瞬間、インデックスの口は開き尖った歯がキラーンと光り輝き、その光り輝いた歯は当麻の頭を噛み付いた。

「どうまのバカッ！ 腹ペコのシスター苛めて楽しいの？ 慈悲なんかないんだから……！」

当麻の頭に思い切りかじり付いたインデックス。腹ペコの怒りで威力も2倍らしい。

「だ、だから謝つているじゃないかつ！！ ふ、不幸だあ——————つ——————！」
その後、ネコのスフィンクスもインデックスと共に当麻にかじりついたのは言うまでも無い。

END

(後書き)

短編なのでこれで終わりです。楽しんで頂けたら光榮です。感想あれば嬉しいです。

次のステップの参考にさせて貰いますので宜しくお願いします。
最後まで読んで頂き有難う御座いました。

P.S. 新たに書き足してみました。ハロウインの要素があまり増えませんでした…。つもうしわけありません…！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5216o/>

不幸のハロウィン

2010年11月11日07時00分発行